

今月のみことば 2024年9月

「私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」 テモテへの手紙 第二4章6～8節

実力によらない希望の約束

7 月末から始まったパリオリンピック、皆さんはご覧になったでしょうか。世界各国からアスリートが集い、様々な競技が行われました。今回、私が注目したのは男子 100m の決勝です。決勝進出した 8 人の選手の 1 位と 8 位のタイム差はたったの 0.12 秒、特にトップ 4 人の順位は写真判定でも甲乙つけがたい程の大接戦でした。選手たちの素晴らしい走りに感動すると同時に、0.01 秒の差でメダルが獲得できなかった 4 人目の選手がどれほど悔しかったかと考えさせられました。競争社会のこの世界では、実力で勝者と敗者が明確になります。勝者にはメダルが与えられ喜びに浸りますが、その背後には負けてしまった人の悲しみ、挫折があることを覚えると、この実力主義の世界の厳しさ、残酷さを覚えさせられます。この競争社会において、どんなに頑張っても勝つことができない人に希望はあるのでしょうか。



聖書には、実力によらない希望の約束が書かれています。冒頭に載せたテモテへの手紙 第二4章6～8節は、ローマの牢獄の中からパウロという人がテモテに送った手紙の中の一節です。時の皇帝は暴君と呼ばれたネロで、獄中のパウロは「私が世を去る時が来ました。」と、処刑による死が目前に迫っていることを悟っていました。自分が捕まって、もうすぐ殺されるという状況になったら皆様はどのような心境になるでしょうか。死の恐怖で気が狂ったようになるかもしれません。しかしパウロは落ち着いた雰囲気と言いました。「私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」パウロは死の恐怖よりも、その先にある希望に目を向けていました。すなわち主なるキリストを信じ慕う信仰者には死で終わらずに、その先で「義の栄冠」が用意されている希望です。パウロにとって目の前の悲惨な状況は何の問題でもなく、地上の生涯を走り終えた先で「よく最後まで走り通した」と主なる神様が栄冠を授けてくださることに思いを馳せていました。これが、キリストを救い主と信じる信仰者の希望です。

この希望は自分の力(実力)によらず、神の御子であるイエス・キリストによって用意された救いによるものであり、この方を救い主として信じ従う全ての人に与えられる希望です。どうか皆様もこの希望をご自分のものとすることができますように。(〇)

